

ディズニー作品からみる母娘の関係

榎原乃亜

本論文は、母娘関係を扱ったディズニー作品のキャラクターの所作や歌に注目し、そこから母と娘の間にどのような関係が築かれているかをみる。そしてアンケート調査を行い、実際の母と娘それぞれが抱える問題を考え、何が娘のモラトリアムの長期化の要因になっているのかを明らかにする。

心理学からみた母娘関係やディズニー作品内の娘像を考える先行研究によって、2000年代以前と以降でディズニー作品の中の娘像は時代と共に変化していることが明らかになった。ここでは「プリンセス」と「普通の娘」を比較することで、求める幸せの形に違いがあることも指摘されていた。

本研究では具体的に母娘関係を扱った「シンデレラ」「塔の上のラプンツェル」「メリダとおそろしの森」の3つを取り上げた。そのうちの「シンデレラ」は2000年代以前に作られたが、近年実写化としてリメイクされたものであった。作品中で「女性らしさ」や「怒り」など、決まった形のないもので娘をコントロールしようとする母の存在と、それをどこか心地よく感じ母の思ったように行動したり、母と同一化したりする娘の存在が確認できた。ディズニー作品中の娘たちは、家事仕事を毎日こなし耐え忍んでいれば王子様がやってきて幸せになれる、という考えから脱却し、自分の幸せは自分で切り開くように変化していると指摘した。母と娘は一度は決別するが、最終的に融和する傾向は複数の作品からみられた。

実際の母娘関係について行ったアンケートでは、娘は母と密接に関わることで自分を自身の幸せとする意識が強くなるという結果がでた。しかし、母側は娘と一線を引く意識が強かった。

アンケート結果から、「自立の意志が弱い娘」の存在はアイデンティティ獲得へのモラトリアムを長期化させていることの要因になることが明らかとなった。モラトリアムの長期化は、自分と他人の境を認識する能力を獲得することを阻むため、現代の母娘関係は歪み易くなっていると言えるだろう。